

恐竜の展示の裏側に迫る

大恐竜展Ⅱに展示されている巨大な恐竜の数々。

こんなに大きなモノはどこから運ばれ、どうやって組み立てているのだろうか？

今回は特別に恐竜の組み立て現場にカメラが潜入。その記録をここで紹介しよう。



5 骨の取り付け

フレームの台座に骨格を乗せ、ワイヤーで一つずつ固定していく。慎重な取り扱いが求められ、現場には緊張感が走る。



4 フレーム組立

まずは、元となる鉄製のフレームを組み立てる。フレームと骨格標本にそれぞれ番号が付されており、それを順番に合わせていく。



6 パーテーションの設置

化石の組み立て完了後、標本の安全と動線の確保を意識してパーテーションを設置。ずれないようにしっかりと固定する。



8 完成！

7 解説パネルの設置

最後に恐竜の解説が書かれたパネルを取り付けたら…

化石の組み立ての動画は下の二次元コードから



3 標本の位置だし

当初の配置計画をもとに、実際のサイズを確認しながら、微調整を繰り返す。数センチ単位での調整が行われた。



1 標本を借り受ける

標本を所有する博物館へ実際に赴き、標本を借り受ける。今回は、三重県総合博物館・群馬県立自然史博物館・国立科学博物館・栃木県立博物館などから標本を借り受けた。



2 搬入された木箱を開封

ネジで厳重に塞がれた木箱から、化石を取り出していく。マメンチサウルスが収納されている箱には、「From Chengdu to Yokohama (中国・成都から横浜へ)」と書かれ、もともとは中国から輸入された標本であることが見て取れる。



全ての骨がバラバラになっており、一つ一つをフレームに直接固定させていく必要がある。上の写真で見える骨の下にもさらに骨が一つの箱に詰められている。

那須塩原と化石

実は那須塩原市は、時代が異なる2種類の化石の産出地として世界的に有名な場所なのだという。1つ目はこの地域がまだ海底だった1200万年前の新第三紀の貝の化石。それらは「塩原動物群」と名称がつけられているほどで、他にも同時代のイルカやカレイの化石も見つかっている。2つ目は30万年前の第四紀の塩原湖成層からとれる木の葉や魚、哺乳類の化石。湖の底は、細かい砂がゆっくり積もるため、表面の細部まで壊れることなく保存される。

それらの化石が有名になった理由は、化石研究の黎明期である1920年代には既にこの地域には多くの著名な古生物の学者が訪れ、研究が進められていたからだという。当時、塩原まで運航していた汽車に乗り、比較的容易に化石産地へアクセスできる立地が研究を後押しした要因の一つである。

今回化石の組み立てを担当した

中川 久雄 氏

(株)パレオサイエンス 代表取締役



化石を組み立ててこの道35年の大ベテラン。化石の販売から納入、組み立てまで一手に引き受け、骨を一目見れば、恐竜のどの部分かは大体把握できるという。「これほど多くの恐竜を地方で見られる機会は滅多にない。ぜひ多くの子どもたちに見てもらいたい」と話してくれた。

